バルザック，わが旅(一)

九　野　民　也

I　序

バルザックゆかりの地を訪ね歩くこと，これは十代なかばからかれの作品に親しんできたわたしにとっての，フランス旅行最大の目的であって，渡仏のたびにわたしは，この地で改めてかれの作品をひもとき，作品に登場する人物たちが徘徊しバルザックが彷徨した場所を，登場人物たちになりきり作者になったような気分で，徘徊し彷徨したいものであると念願してきた。それこそが，作者の生涯と物語の中の現実とを最もよく身近に感じとることであり，作品への理解を深め，バルザックを偲ぶ最良の道であると信じて。

ところで，ひとの生活スタイルを，そのひとの，生活の場所との関係でとらえるとつぎの三つに大別できるかもしれない。すなわち，定住型，移住型，彷徨型。

移住型と彷徨型とをどのあたりで区別するかの線引きはむずかしい。

バルザックは，ツゥールに生まれて，後年パリに上京，パリで活躍したツゥーレーヌ地方出身パリっ子作家としてみなしてそれですむならば，かれは移住型のひとと考えてさしつかえないであろう。しかし，

i）バルザックはパリでの転居を，

1814-1819　タンプル通り 40（現在の 122）
1819-1820　レスディギエール通り 9
1821　ポルトホワン通り 17
1822-1824　ロワドレ通り 7
1824-1826　トゥールノン通り 2
1826-1828　マレーサンジェルマン通り（現在のヴィスコンティ通り）17
1828-1835　カッシーニ通り 1
1835-1838　バターユ通り 13（現在のイエナ通り 9）
1839　リシュリュー通り 108
1840-1847　バッス通り 10（現在のレヌアール通り 47）
1847-1850　フォルテュネ通り（現在のバルザック通り）22

と 11 回も，中心地から当時パリ郊外（現在パリ市第 16 区）に至るまで広範囲にわたって繰り返していること，

ii）パリを舞台にした小説に登場する人物たちが，カルチエ・ラタン学生街，マレー地区，サン・ルイ島，ショセ・ダンタン金融地区，グラン・ブルヴァール遊興地区，シャンゼリゼ商業地区，マドレーヌ新興地区等々，きわめて広い地域にわたって活躍していること，

iii）上京後ほとんど毎年のように，それもかなり長期にわたって，国内各地はもとより外国にも旅行しており，旅行先がしばしば小説の舞台となること，あるいは初めから目的をもって地方へ取材旅行に行っている（当時では取材旅行は珍しい）こと，

などを思うと，彷徨型に近いともいえるであろう。

彷徨といえば，バルザックは『ゴリオ爺さん』のなかでこう書いている。「セーヌ川左岸のサンジャック通りとサンペール通りの間を彷徨したことのない者は，人生について何一つ味わっていないも同然だろう[1)]」

ことわっておかねばならないが，この場合〈彷徨する〉というのは，さ迷いながら歩くことを意味しているのではない。バルザックが用いた〈pratiquer〉なる語に即し

ていえば，これは，実際の情況のもとで身をもって行動する，というきわめて積極的な意味で，したがって，この小説における pratiquer というのは，セーヌ川左岸学生街に何度も足を運ぶことで，この界隈における雑多な事柄を体験し，風俗習慣を観察し，社会を構成するさまざまな階層の特徴を知り，多くの人間を分析する，という意味がこめられているものと考えられる。

さて本稿は，このたび塚本学院海外研修制度の恩恵により，1993年11月1日から翌94年3月31日まで5カ月間，バルザックゆかりの地を訪ねることができ，また，かれの自筆原稿を目にすることもできたことについての，ささやかな報告である。

Ⅱ　バルザックの転居先を訪ねる

◇タンプル通り 122

パリに着して11月初旬，バルザックが15歳から（といってもそのころかれは寄宿学校に預けられていたので，実際には17歳から）20歳まで住んでいたタンプル通り122番地に赴く。ここは，バルザックの父親が，軍のパリ第一糧秣部長に任ぜられた1814年，一家がツゥールを引き上げて移り住んでいたところである。寄宿学校の生活を終わったバルザックは，パリ大学法学部に入学，学生生活を送るとともに，父のすすめで，法律事務所に見習書記として勤めていた。かれは，大学でも法律事務所でも，将来小説家として立つ上での大きな糧を，それと知らずに得ていた。

わたしはメトロをレピュブリック広場でおりて，タンプル通りを南西に下った。この通りは，繊維・衣料・宝石・装身具店がやたらと多く，道行く人々で賑わっていて，商人の町といった印象を与える。バルザック家の所在地122番地の住所標識は見当らないけれど，パスツレル通りと交差するあたりであろう。

ここは，17世紀には貴族の大邸宅が並んでいたマレー地区のはずれであるけれど，大革命以後，貴族たちがこを引き払ったことから，バルザック時代には高級住宅街としての面影はもはやなかったであろう。

◇レスディギエール通り 9

レスディギエール通りは，バスチーユ広場のすぐ近くで，メトロをおりるとすぐに，七月革命記念碑である七月の円柱，新オペラ座，サン＝マルタン運河を眺めてから，サンタントワヌ通りを西に取った。歩きながら，ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』の浮浪者ガブロッシュのやつめ，このあたりをねぐらにしてたんだな，するとこのあたりは，そのようなねぐらと共存できる界隈，つまり貧民窟だったわけだ，という思いが頭をかすめた。レスディギエール通りはすぐに見つかった。サンタントワヌ通りに面して，ボーマルシェの像があった。かれの像に敬意を表してから，ちょうどその反対側にあるレスディギエール通りに向かった。

ここは，1819年20歳のバルザックが家族に対して作家として立つことを宣言，二年間の猶予を貰って一人住まいを許されたところだ。この年，父親は軍糧秣部を退職して，一家はパリ北東のヴィルパリズィに越している。

バルザックは，この通りをこんなふうに書いている。「その頃わたしは，あなたの多分ご存じない小さな通り，レスディギエール通りに住んでいました。この通りは，バスチーユ広場近くの共同井戸の向かい，サンタントワヌ通りに始まってラスリゼ通りに抜ける。学問への情熱に燃えてわたしは屋根裏部屋に住み，夜はその部屋で勉強し，昼は近所の図書館，王弟殿下の図書館ですごしていました[2)]」（『ファチノ・カーネ』）

入口の道の両側には，パン屋と旅行会社があって，賑やかなのはここまでで，これまでの喧騒が嘘のような，ひっそりとした，さびしい，狭い，小さな通りだ。バルザックがいたという9番地には，四階建てに屋根裏部屋の付いた古ぼけた変哲もないビル，その隣り二階建ての，下は住居ともそうとも分からなくて，上は締め切った倉庫のようなのが付いた建物が建っている。わたしはこの粗末な建物の前で，短編『ファチノ・カーネ』の一節を思いだしながら，しばらくたたずんだ。

『ファチノ・カーネ』にはこんなことが書かれている。ここでの生活は質素であったこと。学問に励む者として

修道院生活の掟を守っていたこと。下町の風俗習慣や住民たちやかれらの特徴などを観察するために，よく晴れた日には散歩にでかけたこと。観察は，対象となった人物たちの魂にまで及んでいたこと。観察によって，話者は対象となった人物たちの人生を生きる能力（透視力，第二の視力）を得たこと [3]。バルザックはまさに彷徨 pratiquer していたのである。

この小説の冒頭の幾ページかを反芻しながら，自分もいま，家族と別れてわざわざ独りであることを選んでパリのここ，バルザックゆかりの地にいるのだ，と言い聞かせ，これからの数カ月，修業僧のように欲望をよく抑制して簡素な生活を営み，町の人々の風俗習慣を観察したいものだ，都市ウオッチングをしっかりとしたいものだと切に願った。観察の対象となる人々の魂にまで及び，かれらの人生を想像の上で生きることができたらどんなにか素晴らしいことだろう。

このときわたしは，バルザックわが旅の目的がなんであるか，改めて実地にはっきりと理解した。ゆかりの地に立つことで，かれとのつながりを求めようとしているのだということを。それは，惰性的な日常生活の希薄な時間を過ごすこととは異なって，かれの生活と物語を心によみがえらせる，特別な，濃密な時間を生きるということでもあるだろう。

◇ポルトホワン通り 17

1820 年，バルザックは，ここの屋根裏部屋で書きあげた最初の習作が失敗作であるとの烙印をまず家族全員と数人の友人から押され，ついで，コレージュ・ド・フランスならびにエコール・ポリテクニクで文学を教え自ら戯曲を書くアンドリュー教授からも同じ烙印を押されて，失意のうちにヴィルパリズィの両親のもとで暮らすことになる。

1821 年，かれはヴィルパリズィで，22 歳年上のベルニー夫人と知りあう。この年かれはしばしば上京しており，ポルトホワン通りの父名義の部屋に滞在している。

この通りはタンプル通りと交わっていることを地図で確かめ，以前と同じくメトロはレプュブリック広場でおり通りを南西に下りながらタンプル小公園あたりにさしかかると，前を 2 人の老婆が歩いている姿が目に入った。わたしは彼女たちを追い越さないで，歩調をゆるめた。ふたりとも地味な服装だ。ひとりは背が高くひとりは低い。背の高い女は水色と青の縞模様のマフラーを首に巻き，膝と踝の中間のところまで丈のある濃紺のコートを着，艶のある靴をはいている。背の低い女は，靴も靴下もコートもネッカチーフも薄汚れている。コートの丈は短くて膝のちょっと下までぐらいしかない。色はもともとは青だったにちがいないが今ではひどくあせてしまって灰色に近い。靴のかかとは擦り切れているではないか。厳しい生活を強いられていることが一目瞭然である。そのときどうしてだか，わたしは手の指先が痛いことに気付いた。あかぎれが切れているのだった。あかぎれが切れるなんて，ここ三十数年ついぞなかったことで，今さらながら，パリの寒さの厳しさを思いしらされた。

ポルトホワン通りはすぐに見つかって，前に訪ねたタンプル通り 122 番地あたりからあまりに近く 200 メートルも離れてはいないだろうと思われて，なんだかおかしかった。この周辺に多くある宝石装身具店は卸で，小売はしないのであるらしい。現在 17 番地は四階建ての建物で，その 1 階は真珠の卸商を営んでいるようだ。その向かいの店は，チェス，帽子，ラジオ，地球儀などさまざまな雑貨を扱っている。ぶらぶら歩いていると，紳士用装身具店のショーウインドーに飾られている気障な柄のネクタイ，野鳥を模様化したネクタイ，幾つかの国旗を組合せたようなの，男や女の昔の風俗画をあしらったのが目にとまった。雑然としているがおもしろい町だ。

◇ロワドレ通り 7

1822 年，バルザックはベルニー夫人に愛を告白している。かれの一家はパリのロワドレ通りに移住。この通りはお店といえばレストランとギャラリーがあるだけで，人通りの少ない，寂しい，短い通りであるけれど，そのすぐ近くの通りには，紳士服店，仕立て屋，女性服飾店がじつに多く，古い教会もあり，昔からの庶民の町，というか，いくぶん豊かな商人の町であることがうかがわれる。

このあたりをぶらぶら歩いていてふと，この通りは，

レピュブリック広場とバスチーユ広場のほぼ中間地点で，これまで訪ねた四つの住まい，タンプル通り 122，レスディギエール通り 9，ポルトホワン通り 17，ロワドレ通り 7 はいずれも，これら両広場を結ぶ一本の大きな通り（ブルヴァール・デュ・タンプル，ブルヴァール・デ・フィユ・デュ・カルヴェール，ブルヴァール・ボーマルシェ）の西側にあるのではないか，この大通りから 400 あるいは 500 メートル以内の地点に位置しているのではないかと気づき，大発見でもしたような気分になった。

これまで訪れた四つの地域（すなわち，両広場を結ぶ大通りの西側地域）は，ひとことでいったら庶民の町とでもいったらいいだろうか。

ロワドレ通りの住まいについては，バルザックと父親との間で奇妙な契約書が，「1822 年 11 月 1 日付，オノレ氏との下宿契約 [4]」との書きだしで取り交わされている。それによるとオノレ・バルザックは，父親に，食事代と部屋代を年間，1200 フラン支払わねばならない，というのである。現在の日本円にして 120 万円ほどに相当するのであろうか[5]。

この年バルザックは 23 歳で，前年から，知人の作家との合作で通俗小説を変名を使って大量に制作している。無数の雑文も書いている。よくいえば，ジャーナリズムの世界で文学修行に励んでいたのである。この修行は 1825 年まで続く。

前出の『ファチノ・カーネ』によると，話者の青年は，ブルヴァール・ブールドン，ブルヴァール・デュ・ポント・シュー，ブルヴァール・ボーマルシェの大通りをしばしば彷徨したとある[6]。また，アンビギュ・コミック座から出てくる労働者夫婦に出会ったことが書かれている。アンビギュ・コミック座は当時ブルヴァール・デュ・タンプルにあった。ブルヴァール・デュ・ポント・シューという名前の大通りは実在しないがブルヴァール・デ・フィユ・デュ・カルヴェールに出る通りであると推測されている。ブルヴァール・ブールドンはバスチーユ広場からセーヌ川に南下している。

この小説のようにバルザック自身，17 歳から 25 歳にかけてのこの時期，レピュブリック広場とバスチーユ広場を結ぶ大通りの西側地域からセーヌ川にかけての界隈をずいぶんと彷徨したにちがいない。とうぜんのことながら，セーヌ川左岸も。

どんなふうにか。たとえば小説の話者が，アンビギュ・コミック座から出てくる労働者夫婦のあとを歩き，かれらの外観と会話とから，かれらの生活を想像し，想像力を働かせるあまりいつのまにか自分がかれらと同化してしまった[7]かのように，バルザックもまた，透視力，第二の視力を存分に働かせながらの彷徨だったであろう。

◇トゥールノン通り 2

1824 年，両親がヴィルパリズィに家を買ってパリを引き払ったのを潮に，バルザックは，トゥールノン通り 2 に，部屋を借りて住むこととなる。この通りは，セーヌ通りの南端から始まってリュクサンブール宮殿（上院）の正面ヴォジラール通りに終わる。

かつて近くに住んでいたわたしはこの辺りをもうどれほどぶらついたか数え切れない。あらためて今回，バルザック巡りの特別のこととして日を定めて，この通りを 12 月の某日訪れた。リュクサンブール公園の木々はすでに葉をすっかり落としている。その枝先に目をこらすと，葉芽と思われる小さな突起をいくつも付けている。上院のあたりには常緑樹が繁っていて，鳥の声が聞こえている。門には衛兵がふたり立っており，ヴォジラール通りを越したトゥールノン通りの端には，緑の服を着て緑の箒を持った男がひとり立っている。現在この通りは，服飾店，装身具店，古書店などが並んでいる瀟洒な商店街である。

バルザックは中篇小説『Z・マルカス』の語り手をこの近くに住まわせていて，こう書いている。「そのころぼくは，コルネーユ通りの学生専用の下宿屋，家の奥の螺旋階段の明かりが，まず通りから，ついで隣家に面する窓から，最上階では天窓から取られている下宿屋に住んでいた。（……）空が晴れると学生はすぐに窓を開ける。（……）向かいは閉鎖されているオデオン座の黒くなりかけている黒い壁とボックス席の小窓と広いスレートぶき屋根が目の前に立ちはだかっている[8]」

小説の中のコルネーユ通りは，トゥールノン通り南端

から東へ 100 メートルほどの，オデオン座脇の小さな通り
である。

◇マレーサンジェルマン通り（現在のヴィスコンティ通り）17

1826年，バルザックはマレーサンジェルマン通り（現在のヴィスコンティ通り）17に移って印刷業を始める。1827年，かれは，知人のロエヴ＝ヴィルマルス宛にこう書いている，「読者は，わたしの凡庸さを情け容赦なく証明しました。そこでわたしは読者の味方となって文学者を忘れ活字屋に入れ替わりました[9]」と。つまり，文学修業を放棄したのである。天才にしてかくのごとし，なんと痛ましいことだろう。

ヴィスコンティ通りは，前出のセーヌ通りと西へ200メートルほどの距離をおいてほぼ平行しているボナパルト通りの間に挟まれた，狭い短い通りである。ボナパルト通りもセーヌ通りも古くからのしゃれた町で，さまざまな商店でにぎわっているが，一言でいえば，画廊の町，美術の町と称してさしつかえないであろう。

わたしはサンジェルマン・デ・プレ教会側からボナパルト通りを取り，美術学校の構内に入って，鳩に餌をやったり，キャンパス内に無造作に置いてある石像を眺めたり，女子学生に話しかけたり，教室やアトリエをのぞいたりしてから，少し引き返して，高級な装身具店と屋根裏部屋付きの，壁が少々剥げ落ちている古めかしい五階建て建物との間の，ヴィスコンティ通りに入った。むこうから老女性が左右に小さな女の子を伴い，大きな紙袋をぶらさげてやってくる。さっきまでのにぎわいが嘘のようだ。通りに面した家の窓ガラスの向こうで縫い子が三人働いている。仕立て屋であるらしい。右を見たり左を見たりのんびりぶらぶらしていると，左側24番地の二階建ての古い建物の壁の，「ここにラシーヌ死す，1699年4月21日」という標示が目にとまる。道のなかばあたりまでに，老人，画学生，老女性とすれちがう。

ボナパルト通りから眺めたヴィスコンティ通り

17番地の，三階建ての2階正面に，「この家で，《人間喜劇》の作者バルザック，印刷所を開設する」とのプレートがかかっている。

隣はいまパリ市立保育園であるらしい。その隣は窓ガラス越しにたくさんの彫像や絵画が見える。ギャラリーだ。道の両側の，隣もまた隣も，セーヌ通りへ出てもまたギャラリーで，アフリカ原始美術，現代美術，古版画，古書，作家の自筆原稿，骨董等々が陳列されている。美術骨董街を散策しながら，わたしは，バルザックが美術愛好者であったこと，晩年の大傑作『従兄ポンス』の主人公ポンス，そして，晩年のバルザック自身が，狂的なほどすさまじい美術骨董漁りの人だったことを思いだしていた。

◇カッシーニ通り1

ヴィスコンティ通り時代に手がけた事業，印刷業，活字製作所，出版業等々のことごとくの事業に失敗して，1828年，29歳のバルザックはこの地を離れ，カッシーニ通り1のアパートを借りて移り住む。

同年9月1日付の，父親の昔の上司，ド・ポムルール将軍に宛て，かれは「わたしはふたたびペンをとります[10]」と執筆再開を宣言している。意気高らかな宣言にみえるけれども，かれは自分の才能に十分な確信がもてなくて同じ手紙の中で「わたしに才能があるかどうかまったく疑わしいのですが」という言い方をしている。このときかれはふくろう党の戦いに関係する一事実を聞き及んで，戦いの現地フジェールへ取材旅行することを計画していて，この手紙はブルターニュのフジェールに住んでいる将軍に宿の提供を懇請するために書かれている。「一カ月前から，わたしはたいへん興味深い歴史ものに取

りかかっています。わたしに才能があるかどうかまったく疑わしいのですが，たとえ才能がなくても，わが国民の一時代の風俗を描くのですからきっと幸運がもたらされるであろうと期待しています。（……）／まっさきに思い浮かびましたのは貴台のことで，20 日間ほど身の置き場所をご提供くださるよう貴台にお願いする決心を致しました[11]」

おのれの才能に疑いをいだいているとはいえ，不退転の決意がみなぎってもいる。

翌 1829 年，長編小説『ふくろう党』を，初めてオノレ・バルザックの本名で発表，一躍文名あがる。

1828 年から 35 年までの，カッシーニ時代の足掛け 8 年間に，バルザックは『ソーの舞踏会』『ゴプセック』『カトリーヌ・ド・メディシス』『あら皮』『赤い宿屋』『知られざる傑作』『シャベール大佐』『風流滑稽譚』『三十女』『トゥールの司祭』『捨てられた女』『ルイ・ランベール』『田舎医者』『ウジェニー・グランデ』『フェギュラス』『ランジェ公爵夫人』『金色の眼の女』『絶対の探求』『ゴリオ爺さん』等々，矢継ぎ早に名作を発表している。いったいどんな働きぶりだったのだろうか。

女友達カロー夫人にあてた 1830 年 11 月土曜日朝付の，長い手紙を，バルザックは「簡単な文面でご免なさい，執筆をせきたてられ，昼も夜も働きづめですので[12]」と結んでいる。まるで忙しくて簡潔な手紙が書けないといった感じで。同じくカロー夫人にあてた 1833 年 1 月 1 日付の手紙にはこうある，「わたしは一日 24 時間のうち 18 時間も仕事をしています[13]」「まったくのところ，わたしは書斎から外に出ることがなくて，仕事で疲労困憊しています。（……）まちがいなく完全な休息を必要としています。徹夜とコーヒーが身を磨り減らしているのです[14]」「わたしの思想工場に戻ります[15]」「印刷屋がわたしを引き止めて放さないのです。『ルイ・ランベール』『田舎医者』『風流滑稽譚』が出るまでは出発できません[16]」

思想工場とみずから称している書斎に閉じこもって，印刷屋にせきたてられながら，一日 24 時間のうち 18 時間も執筆に追われつづけている。この鬼気迫る仕事ぶり。妹ロールにあてた 1833 年 10 月 12 日付の手紙では，「ぼくは 6 時に夕食をすませてすぐに寝て，零時半まで眠る。 1 時に従僕のオーギュストがコーヒーをいれてぼくを起こしてくれて，午前 1 時から午後 1 時までぶっとおしで仕事するんだ[17]」と言っている。

1835 年，バルザックのカッシーニ時代，作家のゴーチエはかれに会っている。ゴーチエはこう述べている。「バルザックの容貌は忘れられないものだった。（……）／かれはそのころから部屋着の代わりに白いカシミヤかフランネルの僧服を着，腰は編み紐で結ばれていた。（……）この衣服はかれの目にたぶんかれの根気仕事が余儀なくさせている僧院生活に似た生活を象徴していたのであり，そのために，小説の修道士であるかれはこのような衣服を身につけていたのではなかろうか。とにかくこの白い僧服はかれには素晴らしく似合っていた。かれはインクのほんのわずかなしみひとつない，無垢をけがされていない袖を自慢した。《というのは》とかれは言った。《真の文学者は仕事の間は清潔であらねばならないからね》と[18]」（『バルザックの人生』）

ロダンのバルザック像は，ゴーチエの見た僧服姿ではなかろうか。わたしはこの文章を読むたびにロダンのバルザック像が浮かび，ラスパーユ通りにあるロダンのバルザック像に敬意をもって挨拶に行くたびにこの文章がよみがえる[19]。

ところで，ずっと後年バルザック夫人となるハンスカ夫人との文通が始まるのは，1832 年カッシーニ時代である。

カッシーニ通りはパリ天文台とポール・ロワイヤルに挟まれた小さな狭い通りである。この辺り一帯はヴァル＝ド・グラース界隈と呼ばれ，修道院，高等師範学校，パリ第 5 大学，医学教育機関などがある。ここヴァル＝ド・グラース界隈は，学生街（ソルボンヌ，コレージュ・ド・フランス等々，いくつかの教育機関が存在する）の周辺に位置していて，同じく古くから教育の町だった。

1824-26 年に在住したトゥールノン通りも，1826-28 年のマレーサンジェルマン通り（現在のヴィスコンティ通り）も学生街の中心ではないまでもその周辺に位置していて，したがってバルザックは，25 歳から 36 歳までセーヌ川左岸学生街周辺にずっと住んでいたとみなすことができよう。

カッシーニ通り探訪の日，わたしはポール・ロワイヤルの駅をおりて，左へ車道をわたって，車道より少し高い歩行者専用の分離帯に立って，今おりたばかりの駅を眺めた。それは，あずまやに格子入りのガラス戸をはめこんだような駅舎で，ガラス戸の白，柱の茶，屋根のくすんだ薄青の配色がほどこされ，全体としてしゃれた感じを与えている。東側の歩道には，ネー元帥の全身像が若々しい力をみなぎらせて立っている。北方に目を転じると，オプセルヴァトワールの噴水として知られている彫像，馬たちと裸婦たち，彼女たちが上に伸ばした腕で支えている地球の像が見え，その向こうに，常緑樹が整列している小庭園が続き，さらに，リュクサンブール公園が続き，その奥の宮殿（上院）までがすっかり見渡せる。空は，真中の宮殿の上に，整列している常緑樹に区切られて逆三角形の形で広がっている。方角からして，もし，もっと空気が澄んでいるならば，宮殿の上にモンマルトルの丘が見えるのだろうか。

パリ天文台（オプセルヴァトワール）へ行くのに，わたしはすぐそこへ行かないで，マルコポーロ庭園とカヴァリエ・ド・ラ・サル庭園を囲んでいる形のオプセルヴァトワール大通りをたどりながら行くことを思いついた。リュクサンブール公園にむかって左側の道を取っていると，左側の煉瓦作りの建物の，わたしの頭より少し高めのところに，古代ギリシャ風の哲学者を思わせる市民，軍馬，兵士たちの彫像がほどこされている。女子学生らしい何人かが三々五々、この建物の中に吸いこまれていく。この建物は美術考古学学院というのであるらしい。その隣のもうひとつ別の建物の中庭に入ってぶらぶらしていると若い男がわたしの傍らを通りがかる。なんの建物か尋ねると，大学の薬学部だという。ライトバンのような大きなタクシーから黒いコートを羽織った老紳士がおりて学舎の中に消えていく。教授であろう。リュクサンブール公園の南詰に達して公園を門扉越しに眺めていると，12，3 歳の少年が近づいてきてわたしの前に立って何やら差しだしている。カレンダーとパンフレットだ。わたしはなんですかと尋ねると，少年は，自分の耳のところに手をもっていき，「聞こえないんです。体の不自由な者のためにお願いします」と言う。2 フラン差し出すと，かれはボードをわたしに見せ，40 フランと書いてあるところと寄付する者の住所氏名を書く欄とを指で示した。わたしは，カレンダーはいらない，しかし，2 フラン置いておく，と硬貨をカレンダーの上において立ち去る。自分の行為は，相手を物乞い扱いしたことになりはしないか，と反省しながら歩いているとマルコポーロ庭園の入口のところでふたたびこの少年に出会った。少年は目で合図し笑顔を送ってよこした。

オプセルヴァトワール大通りの終わる天文台の入口に達して，天文台の中庭の写真を撮ったりぼんやりしたりしていると，若い守衛が近づいてきて，「きょうはもう見学できない，このパンフレットに書いてある見学時間にいらっしゃい」といってパンフをくれた。カッシーニ通りは天文台の正面に並んでいる通りで，フォーブール・サンジャック通りに交差している。バルザックが住んでいた 1 番地は，天文台側，フォーブール・サンジャック通りと交差する角のところである。カッシーニ通りは人通りが少ない割には白衣を着た女性がかなり目に付く。1 番地の，屋根裏部屋の付いた五階建ての建物を眺めていると，バルザックの仕事ぶりが思いだされてきて，バルザックが横からひょいと飛んできて，どうだ，おれをしっかり読んでいるか，きみは自分のものをちゃんと書いているか，と呼びとめるように大声で言い，きみは，歴史や世間について知っているか，情熱や劇的要素について知っているか[20]，視野を広げてくれる女友達をもっているかい，人々と交際する暇がちゃんとあるのかね，物事をよく観察するんだ，アイデアを獲得することだ[21]，想像の上でさまざまな人生を生きること，草花の色彩や香りに魂を奪われるほどの情熱をもつことだね[22]，第二の視力というか透視力を身につけることです，いいかね，きみ，何よりも根気よく続けることだね[23]，そう語りかけているバルザックを傍らに感じて軽い目まいをおぼえた。

われにかえってフォーブール・サンジャック通りを右にまわって数歩行ったところで，右側に，庭の奥に控えている二階建ての瀟洒な建物が目にとまった。文芸家協会が入っている館であるらしく，わたしは庭園への道に足を踏みいれた。庭の中央には，高い落葉樹があって，その周りに緑の灌木が配されている。芝生はこの真冬に

も瑞瑞しい緑で豊かに密生している。この建物から出てきた男に,「ここは文芸家協会ですね。ぼくはツゥーリストですが，何か見るべきもの有りますか」と尋ねると，「何も有りません，ムッシュウ」という返事だった。

通りへ引き返してから，バルザックは文芸家協会の会長をしてたんじゃなかったかな，とふと思いだしたけれど，わたしはこのままこの通りをポール・ロワイヤルの駅へ向かった。通りには，白衣を着た女性や学生らしい若い男女にあふれていて，病院と教育機関の界隈であることが明瞭だ。コシャン＝ポール・ロワイヤル医学部と書かれた建物の前の歩道に，50 歳前後の男が焦茶色のオーヴァコートにくるまって寝転がっている。その傍らに赤ワインが入ったままの容器，どうやら瓶ではないらしいのが，2 本転がっている。からのも 1 本転がっている。そのすぐそばを男には見向きもしないで，黒い帽子，黒い毛皮を身につけ，見事なほど品のいい化粧をほどこした老女性がゆっくりと通りすがっている。わたしは男の横に立った。男は眠っているようだった。わたしは足もとに温かい空気が流れているのを感じた。男は，地下から温かい空気が吹き上げてくる鉄格子の蓋の上に身を横たえているのだ。

◇バターユ通り 13（現在のイエナ通り 9）

1835 年，36 歳のバルザックは，バターユ通り 13 （現在のイエナ通り 9）に越し，ここで，38 年まで足掛け 4 年過ごすこととなる。この時期,『セラフィタ』『ファチノ・カーネ』『谷間の百合』『老嬢』『幻滅』が書かれており，かれは相変わらず執筆に明け暮れている。1836 年 6 月 26 日付カロー夫人宛の手紙にこう書いている。「溺れて咽喉が詰まりはしないかと恐れている人のように戦っています。今のところサッシェで一日 16 時間仕事をしています。（……）／わたしはパリでは，24 時間のうち 2 時間しか寝ないで，昼も夜も仕事をしていました[24]」

ここに越した翌年，国民軍兵役義務違反のかどで 4 月 27 日朝自宅で逮捕された。同日かれはルイーズなる女性にあてて，「わたしは逮捕され，国民軍の刑罰を受けるため，6 日間の拘留の刑に処せられました[25]」と書き送っている。投獄されてかれはどんな思いだったか。同じくルイーズにあてて，4 月 29 日か 30 日付の手紙でこう書いている。「あなたの花がわたしの牢獄を香りで満たしています。／（……）空の青さを見ることのできる部屋にいます（……），前よりもっと気楽に仕事ができるでしょう。／（……）わたしはここで，24 時間のうち 18 時間，わが家で働くのと同じように働くでしょう。場所によってではなくて，思考によって生きるときには，どこに居ても構わないのです[26]」

まことにあっぱれというべきではなかろうか。わたしはこの手紙を前にして，ジャン＝ジャック・ルソーの『孤独な散歩者の夢想』における次の一節を思いださずにいられない。――「バスチーユや何も目に入らない牢獄であっても，わたしは気持ちよく夢想にふけることができるだろうとしばしば思ったものだ[27]」

イエナ通りは，セーヌ川右岸シャイヨ宮のあるトロカデロ庭園近くに始まり，シャンゼリゼー大通りの凱旋門ドゴール広場に抜ける。ここに越したのは，借金が重なって債権者からのがれるためであったとはいえ，かれの収入がふえたためでもあって，ともかくバルザックの左岸学生街時代は終わった。かれの部屋から，セーヌ川，シャン＝ド＝マルス，士官学校，アンヴァリッド，ムードンの丘等々を眺めることのできる結構豪勢な住まいだった。貧民街のレスデギエール通りの生活から始まって学生街を経，シャイヨに転居したということは，バルザックの経済生活の着実な向上を示しているといえよう。

メトロをトロカデロでおりると，日本人旅行客が 4，5 人ずつグループになってエッフェル塔を背景にして並んで，写真を撮り合っている。警官にイエナ通りへの道を聞いたけれど，自動車の激しく行き交う大きな道路が幾つも錯綜していてなかなか見つけられない。やっとイエナ通りの始まりに達すると，これまでのバルザックの転居先の雰囲気とはまるでちがう。大きな通りで，車の往来は相当にあるけれど，人通りは少ない。商店はあまり多くない。キャフェやレストランはあるのかしら。公的機関とそれに関係する企業の事務所でも集まっている町で，通りに面した建物の 1 階はそれらが占め，通りから奥にはいったところや 2 階以上は一般住宅となっていてビジネス街兼高級住宅街といったところだろうか。そ

んなことを考えながらぶらぶら歩いていたら，東洋美術ギメ美術館という建物にぶつかった。ためらわず入館料26 フラン払って入った。バルザックのことをすっかり忘れて作品の数々に魅せられた。館外に出ると，その隣がバルザックの在住していた 9 番地であった。屋根裏部屋付の三階建ての建物で今は工事中だ。いささか殺風景なこの通りを，キャフェかレストランでもあったらコーヒーを飲むなり食事をするなりしようと思って歩いていたところ，それらしい店には一軒も出会わないうちに，シャンゼリゼー大通りの西詰，ドゴール広場凱旋門に達してしまった。

◇リシュリュー通り 108

バルザックがリシュリュー通り 108 に部屋を借りたのは，1839 年，40 歳のときである。この年の創作活動も旺盛で『村の司祭』『骨董室』『幻滅（第二部）』『ド・カディニャン公妃の秘密』『マッシミルラ・ドーニ』『イヴの娘』等々が発表されている。

この年の 11 月末，バルザックはカロー夫人にあてて「今から 2 年の間に，わたしは立派な全作品集を出します[28]」と書き送っている。自分の全作品を『人間喜劇』の総題のもとに刊行する構想が芽生えたのであろう。

流行作家バルザックはリシュリュー通りから当時無名に近かったスタンダールに対して，スタンダール作『パルムの僧院』絶賛の手紙（1839 年 3 月末）を書き送っている，いわく，「わたしは，〈ル・コンスティテュシュネル〉で『パルムの僧院』の抜粋を読み，羨望という罪を犯しました。然り，戦争の，素晴らしい迫真の描写に対して，わたしは激しい嫉妬にとらえられたのです[29]」

リシュリュー通りは，コメディ・フランセーズのあるマルロー広場に始まってブルヴァール・モンマルトルに抜ける通りで，人通りの多い垢抜けした感じの商店街である。途中，モリエールの座像があり，国立図書館がある。この通りは，バルザック小説の主要舞台であるパレ＝ロワイヤル界隈とグラン・ブルヴァール遊興地区とを結んでいる。同じく小説の登場人物が出没するオペラ座界隈，ショセ・ダンタン金融地区にも近い。

この通りの 108 番地を訪ねた日，それはひどく寒い日で，国立図書館近くの路上に 40 歳前後の浮浪者のような男たちがふたりいた。ひとりは膝をかかえてじっとしてい，ひとりは地面に横になっていた。かれらの傍らに赤ワインの瓶が 1 本立っていた。108 番地はブルヴァール・モンマルトルに抜ける数軒手前のところにあって，このあたりから，キャフェ・バーやキャフェ・レストランが目立ちはじめる。わたしは散歩の疲れをいやすために，この通りの終わりでブルヴァール・モンマルトルに面している角の大きなキャフェ・レストランに入って生ビールを注文した。

車や人々の激しい往来を眺め，咽喉を潤しながら，バルザックの登場人物たちが，この遊興地区で活躍していたことを思いだしていた。『従兄ポンス』の，だれの目にも年寄りじみてみえるポンスが，骨董屋で掘り出してきた扇をもって，「鼻先を前方に突き出すようにし，もったいぶった口元を作って，儲け仕事をすませてきたばかりの商人，あるいは，女性の寝室から抜け出してきて自己満足にひたっている独身男といった格好[30]」で歩いていたのはこのあたりではなかっただろうか。たしかブルヴァール・デ・ジタリアンといったはずでその大通りはいま目にしている左前方の通りで，自分が今いるここ，この地点は，ブルヴァール・デ・ジタリアンとブルヴァール・モンマルトルの結び目ではないのか。

やせた老ポンスがキャフェの椅子に腰かけているわれわれを笑わせようとして歩いている姿が目に浮かぶようだ。わたしはもう一杯生ビールを注文して，通行人たちをぼんやり眺めていた。まるで，バルザック描くところの，「通りにでている椅子にかけて，毎日通行人を値踏みする楽しみにふけっている人々[31]」の一人，にわかじたてのパリジャンになったような気分で。

◇バッス通り 10（現在のレヌアール通り 47）

1840 年，バルザックは債権者の目をのがれるために，家政婦ブリュニョル夫人の仮名でパリ郊外パッシー・バッス通り 10（現在のパリ市 16 区，レヌアール通り 47）に越す。46 年までの足掛け 7 年間，41 歳から 47 歳までここですごしており，この間に，主要な作品『暗黒事件』『二人の若妻の手記』『カトリーヌ・ド・メディシス』『人生

の門出』『ラブイユーズ』『ユルシュル・ミルエ』『オノリーヌ』『幻滅』『モデスト・ミニョン』『ゴディサール二世』等々が発表され，全集『人間喜劇』の刊行が始まっている。後年刊行されることになる『従妹ベット』『従兄ポンス』『浮かれ女盛衰記』等々が，この家で書かれている。仕事ぶりのすさまじさは相変わらずで，バルザックは友人知己にあててこう書いている。「朝の 3 時から午後の 4 時まで仕事をするという具合に，わたしは今，仕事に没頭しています[32]」（1844 年 1 月 9 日，ダヴィッド・ダンシェ宛），「わたしは一日 16 時間働いています。それなのにまだ 10 万フランの借金があります！そして，わたしはもう 45 歳！わびしい話です[33]」（1845 年 1 月，カロー夫人宛）。

いっぽう，このころから体の衰えが自覚され始めて，手紙の中に，つぎのような文言がみえる。「ぼくの筆力はこの一年来衰えています。（……）ぼくは雑文でその日暮らしをしています,それだってすでに失われてしまった青年期の敏捷さではもう書けません[34]」（1842 年 4 月，母親宛），「仕事が必要であるのに，そのせいで体力が衰弱し，わたしはおびえています[35]」（1843 年 4 月，テオドール・ダブラン宛），「悲しいことに，18 年間仕事をしてきて初めて，重大な病気，肝臓炎にかかりました。（……）わたしは寝たきりでもう仕事もしていません[36]」（1844 年 4 月，カストリー侯爵夫人宛）。肝臓炎，黄疸症状のほかには，歯痛，頭痛，神経痛に悩まされ，蜘蛛膜炎にもかかっている。

パッシーのレヌアール通り 47 には，現在バルザック館が一般公開されている。かれの時代にはパッシーはまだパリ郊外で，ここがパリ市に編入されたのは，かれの死後 9 年後の 1859 年である。ここパッシーは，ブーローニュの森とセーヌ川に挟まれたパリ市西端で，シャイヨ宮，シャン＝ド＝マルスに近い高台の高級住宅街である。かつては，葡萄が栽培されていた村であり，庭園やしゃれた別荘風の一戸建てがあった。いまでは，高級感のある高層建築が建ち並んでいる。

バルザック館は，生前かれが住んでいた幾つかの家のうち，現存する唯一の家である。パリ市編入以前の，パッシー村時代の名残をとどめる唯一の家でもある。

バルザック館へは，わたしは 1968 年の最初の渡仏以来何度も訪れている。10 回はこえるだろう。館内には，バルザックの肖像画はもとより，家族や友人知己の肖像画，かれをテーマにしたカリカチュア，自筆原稿，肉筆書簡，挿絵の多い（おそらくは）初版本，ブロンズ，版画，絵画，それに，机やチョッキやステッキなどの遺品の数々がある。遺品を前にして，わたしは，チョッキを身につけステッキをもって社交界に出かけてカリカチュアの餌食になったバルザックの姿が，目の前に現われてくるような気がした。

遺品のうち最も強く惹かれたのは，自筆原稿と机だった。バルザックの簡素な机の前にたたずんでじっとそれを眺めていると，バルザックが，例のカシミヤやフランネルの僧服を身にまとって机に向かい，流麗で，どことなく几帳面な感じを与える字体で勢いよくペンを走らせている姿，仕事の鬼と化している気魄迫る姿が，ぼうと浮かんでくる。しかし，パッシー時代のかれは体が衰え始めていたのだということに思い至ると，黄疸にやられて，弱弱しく笑うバルザックの黄色い顔[37]がかすめて，わたしはぞっとした。

バルザック館はレヌアール通りに面する 1 階が，実は 3 階であって，3 階の入口から 2 階，1 階へと見学することになる。階段は狭い。バルザックはこの家で五つの部屋を使っていたといわれている。すなわち，食堂，寝室，一続きの居間・書斎，台所，客間。3 階に面した庭に出ると，広々としていて，樹木が多い。1992 年の夏に訪れたときは，木々は濃い緑の枝葉を繁らせていて，木の下は小暗い感じだった。今回の冬の旅では，木々は葉を落としている。木立の間に，うつむきかげんでたくましい表情の，バルザックの胸像がふたつ立っている。塀の内側には，『人間喜劇』の登場人物たちの活躍ぶりを描いた横に細長い壁面彫刻があって，これが素晴らしい。セーヌ川の方角に目を転じると，エッフェル塔が間近にそびえている。

わたしは別の日，バルザック館を素通りして，レヌアール通りをこの通りが終わるブランヴィリエ通りに交差するところまで歩いたことがある。下り坂だった。ご丁寧にもわたしはこの道を引き返して，ベルトン通りと交

差するところまで登った。下りのときは気付かなかったけれど，登るのにかなりしんどい坂道である。パッシーがかなりの高台であることを実感したことになる。

バルザック館の裏側（1階）に面しているベルトン通りを取ってほんのしばらく歩を進めると，10人以上の若い男女が，左側の，10メートルほども上の鉄柵の向こうでわいわいがやがやと賑やかに騒いでいる。わたしは大声で，「あなたたちがいるそこは，バルザック館の庭ではありませんか」と叫んだ。かれらは一斉にこちらを向いて遥か下の方のわたしに「そうですよ，ここはバルザック館ですよ」と答え，それから，わたしたち両者の間で大声による賑やかな問答が始まった。かれらはオルレアンからやってきた高校生で，バルザックは『ゴリオ爺さん』以外あまり読んでいないということだ。かれらからバルザックのことを聞かれるままに，大好きで，高校時代から読みつづけていると答えると，かれらは「アンクルワヤーブル」信じられない，とにこにこと大合唱を送って寄越した。カメラを向けると，皆がみな大喜びで手をふって愛敬をふりまいてくれた。

かれらと別れ，ふたたびベルトン通りをセーヌ川に向かって歩き始めた。24番地はバルザックの家の裏口があったところで，レヌアール通りに面する3階から債権者が来ても，債権者のほうでは平屋だと思って安心しているうちに，わがバルザックは床の揚げ蓋から2階，1階へとおり，1階の裏口からベルトン通りへ身をくらませる仕掛けであったとは，まるで小説の中のような話でなんともおかしい。

この通りは，苔むした石畳で，狭く，短く，古めかしく，道の両側の建物の塀には蔓性の植物が垂れていたり，道に沿う石壁はモスグリーンの色をしていてその色彩が光と陰によって生じる明暗で微妙な違いをみせていたり，石壁の上からは大きな常緑樹がおおいかぶさっていたりしていて，バルザック時代の面影が感じられ，なかなかの風情がある。

◇フォルテュネ通り（現在のバルザック通り）22

フォルテュネ通り（現在のバルザック通り）22の家に越したのは，1847年，バルザック47歳のときで，3年後の1850年，かれはこの家で息を引き取る。51歳だった。

この家に越したのは，1842年に夫を喪ったハンスカ夫人を妻として迎え，愛とくつろぎがあって，品位を保った慎ましい静かな暮らし方をしながら『人間喜劇』の総仕上げをするためだった。しかし，衰弱した体は，もう旺盛な創作活動を許さなかった。「1848年には，ぼくは，ああ，まさに年貢を納めかけたんだ[38]」と，妹ロールにあてて書いている1849年）。このとき，かれは胃病に悩ま

バルザック館の裏側に面しているベルトン通り

バルザック通りとフリードラン大通りの交差地点．右はバルザック像，正面奥は凱旋門

され，心臓肥大症を起こし，狭心症の発作に襲われている。

1850 年 3 月 14 日，バルザックはハンスカ夫人と結婚。新郎バルザックの体は衰弱しきっていて，視覚異常で気管支カタルもわずらっている。眼病については，「ぼくの眼病のひどさは，自分が書いている手紙の字が読めないほどだ[39]」と，妹ロールへの手紙（1850 年 5 月 11 日）にある。また，作家ゴーチエにあてて「ぼくは読むこともできなければ書くこともできない[40]」と書き送っている（1850 年 6 月 20 日）。やがて病状は悪化，心臓発作が続き，腹膜炎を併発，8 月 18 日危篤，バルザックの左足の傷は壊疽となっており，脂肪膜性水腫の症状がで，豚の脂身のような体になりはてて，同日夜 11 時 30 分，永眠。

フォルテュネ通り（現在のバルザック通り）22 の家は 19 世紀末取り払われて現在何も残っていないけれど，外観の全景や邸の内部を描いた水彩画アルバムが残されている。邸は円屋根のサン・ニコラ礼拝堂と背中合せとなっている。この礼拝堂の見事な回廊特別席まで，邸の階段踊り場の扉を通って自由に出入りすることができるようになっている。邸が庭と美しい教会の間にあって，礼拝堂へは部屋から自由に行き来できるのが，バルザックには自慢だった。

バルザック通りは，シャンゼリゼー大通り 124 から始まってフォーブール・サントノレ大通り 195 に終わる。この通りの始まるシャンゼリゼー大通りの地点と，この通りが交差するフリードラン大通りの地点の，二地点のいずれからも，ドゴール広場凱旋門は間近に見える。500 メートルも離れていないだろう。

わたしはメトロをジョルジュサンクでおり，シャンゼリゼー大通りを横切ってバルザック通りを北へ取った。ル・バルザックという名前の映画館が左手に見えてきた。通りを一つ越すと右手にオテル・バルザックなるホテル，また一つだか二つだか通りを越したあたりで，ブラスリ・バルザックなるキャフェ・レストランが現われた。フリードラン大通りに達すると，部屋着姿の，バルザックの大きな座像がある。この像に敬意を表してからまた歩を進めると，100 メートル以上もあろうかと思われる石壁が続いている。この石壁の内側がバルザック邸跡だろうか。のちのロスチャイルド家の広大な屋敷跡だろうか。はたせるかな，石壁の中ほどに大きな標識があってこう書かれている。「ここは，1799 年 5 月 20 日ツゥールに生まれた《人間喜劇》の作者オノレ・ド・バルザックが，1850 年 8 月 18 日に没した邸跡である」

わたしはフォーブール・サントノレ大通りに出て，バルザックの邸跡に隣接する国立写真センターに 30 フラン支払って入館，センター内から邸跡の，なかなか趣ある庭園をあかず眺めた。何本もの喬木は黄色い葉をつけ，灌木たちは緑の葉を繁らせ，芝生は青々としてい，野鳥がたわむれていた。空は珍しく晴れわたっていた。

1835 年以来 1850 年までの 15 年間，バルザックはリシュリュー通り時代の 1 年間を除いて，ずっとシャンゼリゼー大通りをはさんでシャイヨ宮に近いパリ西端の高級住宅街に住んでいたことになる。

こうしてかれの転居先を一つ一つ訪ねてみると，かれのパリ時代は，i) 10 代後半から 20 代前半までのレプュブリック広場とバスティーユ広場を結ぶ大通りの西側地域である庶民の町，ii) 20 代後半から 36 歳までのセーヌ川左岸学生街周辺，iii) 36 歳から 51 歳の，シャイヨ宮付近パリ西部高級住宅街へと，経済生活ならびに社会的身分の変化に見合って住む地域を移動していったことがわかる。

それにしても，貴族趣味のバルザック，かれの作りだした小説の登場人物たちの貴族たちが住んでいたり誰かれが出没したりするフォーブール・サンジェルマン，最高級住宅街には，かれ自身はついに一家を構えることはできなかった。

この報告はまだ終わらない。しかし，ここでいったん筆を擱く。バルザックの作品と関係の深い地方各地，ブルターニュ地方（『ふくろう党』），ロワール川流域（『谷間の百合』『ウジェニー・グランデ』），アングーモア地方（『幻滅』），リムーザン地方（『村の司祭』）等々への旅行の記，パリを舞台にした小説の中の幾つかの界隈，カルチエ・ラタン学生街，ショセ・ダンタン金融地区，グランブルヴァール遊興地区等々への散策の記は，他日を期

し，次号以下に発表することとしたい。

注

（１） Honoré de Balzac, la Comédie humaine, 2, éd. Seuil, 1965, Le père Goriot, p. 248.
参考までに，
原文：Qui n'a pas pratiqué la rive gauche de la Seine, entre la rue Saint-Jacques et la rue des Saints-Pères, ne connaît rien à la vie humaine !
平岡篤頼訳：セーヌ左岸のサン＝ジャック街とサン・ペール街の間を彷徨したことのない者は，人生について何もしらないに等しいのだ！（『ゴリオ爺さん』新潮文庫，昭和 47 年，p.128）
小西茂也訳：セーヌの左岸，サン・ジャック街とサン・ペール街の間を，通暁したものでなくては，人生の味は，とうていわからないだろう！（『バルザック全集』8，東京創元社，昭和 34 年，『ゴリオ爺さん』p.86）
英訳：The man who does not know the left bank of the Seine, the Rue Saint-Jacques and the Rue des Saints-Pères, knows nothing of life.（*Old Goriot* translated by MARION AYTON GRAWFORD, Penguin books, 1971, p. 120）

（２） la Comédie humaine, 4, éd. Seuil, 1966, Facino cane, p. 257.

（３） Ibid., p. 257.

（４） Honoré de Balzac, Correspondance, Tome premier, éd. Classiques Garnier, 1960, p. 210.

（５） 鹿島茂『馬車が買いたい！』（白水社，1990 年）によれば，バルザックの時代の物価をだいたい 33 倍すれば今日のフランスの物価に近いものがでてくるということである。1 フランを 30 円とすると，1 フランが 990 円，約 1000 円である。したがって，1200 フランは，120 万円である。

（６） Facino cane, p. 257.

（７） Ibid., pp. 257-8.

（８） la Comédie humaine, 5, éd. Seuil, 1966, Z・Marcas, p. 608.

（９） Correspondance, Tome premier, p. 317

(10) Ibid., p. 336.

(11) Ibid., pp. 336-7.

(12) Correspondance, Tome deuxième, 1962, p. 215.

(13) Ibid., p. 216.

(14) Ibid., p. 216.

(15) Ibid., p. 216.

(16) Ibid., pp. 216-7.

(17) Ibid., p. 393.

(18) La vie de Balzac racontée par Theophile Gautier, la pensée universelle, 1981, pp. 24-5.

(19) バルザックの記念碑を制作するように文芸家協会から依嘱されたロダンは，部屋着姿のバルザック像を制作した。しかるに，これが文芸家協会から拒絶された。そのことについてロダンはこう言っている。「何の理によって人は私にあの袖びろの部屋着をいけないと言ったのでしょう。（……）その人物を彷彿させるには一つのやり方しかなかった。髪を乱し，夢想の中に眼を喪失して彼の仕事部屋の中であえいでいるバルザックを示すより外はなかった」（高村光太郎訳『ロダンの言葉抄』岩波文庫，1991 年，p.287）。部屋着と僧服の違いがあるけれど，わたしはこだわらない。いずれにしても仕事着であろう。

(20) 1835 年 8 月 20 日付カロー夫人宛手紙の中で，夫人に紹介された文筆家志望の青年について，「かれは歴史について何も知らない，世間について何も知りません，（……）情熱についても何も知らない，（……）その上，劇的要素も知らないのです」と書いている。Correspondance, Tome deuxième, p. 717.

(21) 前と同じ手紙の中で，「かれは視野を広げてくれる女友達たちに出会えるでしょうか。（……）サロンに出入りする暇があるでしょうか。観察の才をもっているでしょうか，アイデアを生むでしょうか」Ibid.,p. 718.

(22) 1835 年 4 月 17 日付，カロー夫人宛の手紙の中でこう書いている，「わたしの中には，さまざまな人間がいます。金融関係者，新聞や大衆に対して闘う芸術家，そして，自分の仕事や自分のテーマと共に闘う芸術家。それと花の根もとの芝草の上に横になって，花の色彩に見とれ花の香りを嗅ぎほれる情熱家がいます」と。Ibid., p. 662.

(23) 前掲 1835 年 8 月 20 日付カロー夫人宛手紙，「作家たちだけが，自分たちがどのような現象で構成されているかを知っています。幸運，才能，エネルギー，根気，健康，第二の視力等々です」。Ibid., p. 718.

(24) Correspondance, Tome III, 1964, pp. 109-110.

(25) Ibid., p. 72.

(26) Ibid., p. 74.

(27) J.-J. Rousseau, Œuvre complètes I. Bibliothèque de la Pléiade, 1986, Le rêveries du promeneur solitaire, p. 1048.

(28) Correspondance, Tome III, p. 771.

(29) Ibid., Tome III, p. 583.

(30) la Comédie humaine, 5, éd. Seuil, 1966, le Cousin Pons, p. 165.

(31) Ibid., p. 165.

(32) Correspondance, Tome IV, 1966, p. 661.

(33) Ibid., p. 770.

(34) Ibid., p. 441.

(35) Ibid., p. 587.

(36) Ibid., pp. 690-691.

(37) 前掲 1844 年 4 月カストリー候爵夫人宛手紙の中にこうある。「わたしはもう笑うことができません。もし，お望みとあれば，黄色い顔で笑うでしょう。いまいましい肝臓疾患のせいで黄疸がでていますので」Ibid., pp. 690-691.

(38) Correspondance, Tome V, 1969, p. 556.

(39) Ibid., p. 757.

(40) Ibid., p. 784.